

ラグビー再発見

flair 個人の発想・判断を生かす必要性が話題になっているのは、ラグビー再発見のよいチャンスです。power 全盛時代に行き詰まりから、power を生かす flair が強調され認識不足を指摘されて久しいのに、プレーの改善がなかなか見られませんでした。旧態依然として封建的な組織体チームの中で、上下関係が絶対的な風土では、「このようにしたらよいのではないか、あのようによいのではないか」といった発想がなかなか生かされにくいものです。

現代ラグビーの原典「The Guide for Coaches」の冒頭の言葉を復習しましょう。

ATTITUDE and FUNDAMENTALS

A.PHILOSOPHY

B.FUNDAMENTALS

The Seven P's

The requirements for each are:

- 1.Psychology
- 2.Physique
- 3.Picking
- 4.Position
- 5.Possession
- 6.Passing
- 7.Pace

Remember- Rugby Football is essentially a passing game - make the ball do the work.

- 4.- all must know each other's job in the team thoroughly - think as part of a team with emphasis on scanning.

scanning 医学語の CT スキャンをよく耳にします。写真電送や TV の走査です。

発想とそれを生かした先人の発祥の話を思い起こして下さい。ラグビーの発祥は、kicking game でボールを持って走るという発想から生まれたものです。その瞬間、及びそれ以後の競技の中で、ボールを持って走って前進するのもよいではないかという発想が肯定されなければ、ラグビーは今日存在しなかったのです。ラグビー発祥の話は、競技の核心で理念の根幹として伝えられ引き継がれてきたもので、現代の私達に、発想の重要さを教え、発想を生かすことへの自信を与え激励してくれるものです。ラグビーを愛す心と情熱からの発想に自信と積極的な主体性を持って競技に挑戦することによって、good bright interesting game が楽しむことができるのです。

ゲーム中、刻一刻状況が変化します。常時判断が要求されるのですが、残念ながら封建的組織や風土の中で育ったプレーヤーは、発想すること、発想を生かすことに慣れていません。しかし、一部始終、細かい部分まで指示された通り、練習で経験した通りすること以外、状況変化に応じて応用問題を解くことに苦手なプレーヤーも、情熱があれば今日のエリス少年になれるのです。

エリス少年がフットボールでボールを持って走ったことによって、蒔かれた種が芽をだし、ボールを持って走る楽しさから一つの passing game がうまれましたが、獲得したボールを横へパスだけの時代があり、直ちに running handling game とは行きませんでした。on the ball という題の歌があります。獲得したボールを味方が順に回して突破前進することを謳歌したのですが、タッチから 10m 内のボールは反転継続するという工夫以外 FW はボールとり専門、TB (バックス) はパス専門というものでした。後に、捕まったウイングのところへ FW が行って再びボールとりまたパスをつなぐというパターン固まってきました。発想が殆ど問題にされない、FW・TB 分業で flare (FLAIR と同音異語) 時代が続きました。そして 1960 年代の改革が始まるのです。現代ラグビーの基になっている発想について振り返ってみましょう。

1945 年第 2 次世界大戦の集結から、1971 年の RFU 創立 100 周年にかけて、躍動的で自由な人間性豊かなラグビーへ大変革をとげました。The name of the game is ENJOYMENT. 10m サークルロー以外は思いきり (本能的に) 活動しなさい。南アのダニー・クレイブンは前で戦うことの当然性を叫び、スクラムハーフが一番前にいるバックスだとサイドを果敢に突き、縦に押しを重視したスクラムの第 3 列のフランカーという呼称のもとに第 2 列へあげて、展開の効用を拡大しました。バックスも攻防 line 対 line の固定的意識から、前の、近くプレーヤーがボールに関わる効用に着目し拡大しました。RFU は 1974 年の Coaching Scheme に flair が取り上げられて 30 年たちますが、未だ power が優先しています。flair は発想を出せる風土と発想を大切に生かす風土からの産物です。kicking game から passing game と進化し、さらに running handling game へと進化しました。handling は長いパスだけでなく、ごく接近したのものからスイッチなど手渡しも常習手段として取り入れられました。ルールも同じ理念のもとに、方向性をう

ちだしました。タックル後のパスや、ボールの放しかたについての改定は handling game の方向へ加速し連続展開を容易にしました。既製概念に捕らわれることなく、積極的にラグビーの面白さを再発見が成され、flair 意識の向上によりそれを身につけたプレイヤーが育ち、流動的で変化に富んだ楽しいラグビーが展開されることが切望されています。戦うのは勿論、見ても楽しいラグビーの普及が待望されています。

2006.05.21

西川 義行